

आयूस: あーゆす

〈発行〉 京都文教大学図書館
京都文教短期大学図書館／京都府宇治市槇島町千足80

図書と活字と情報と

京都文教大学図書館長

現代社会学科・教授(経営学・組織論) 渡 辺 峻

1960年代を学生・院生として大学時代を過ごした世代にとって、紙と活字で構成される「本」には格別の想いがある。と言うより、当時の大学では、基本的に「本」を通じてしか、体系的な知識や重要情報は入手出来なかったからであり、あとは教壇からの教授の口頭伝達が主要な媒体であった、と思う。したがって、当時の大学の図書館は知識と情報の宝庫であり、そこには特別な空気が流れており、いわば大学の中で最も神聖な空間でもあった。

当時の私には、下宿の書棚に「本」を積み上げ、その背表紙を眺めているだけでも、なんだか賢くなったような気がしていた。専門分野の著名な古典的書物は、手元に持っていないと、それだけでも馬鹿にされる雰囲気があったので、古本屋を巡り、なんとか入手するのも楽しみのひとつであった。「蔵書印」なるものも注文して造り、購入のつど押印して悦に入ったものである。

多くの教授は、自分の学位論文を著書として刊行していたので、講義室では、それをテキスト本として読まされ、教壇からの口頭説明により理解を深める、という方法で勉学することが基本であった。自らが渾身の力で書き上げた学位請求論文を、20歳前後の学部生に読ませることに、教授も、学生も、なんら疑問を感じなかったし、「大学での学問とはそんなものだ」と受け止めていた。いま思えば、自分を含めて、「よくまあ不満

を言うことなく黙々と勉学に励んだものだ」と、いう想いがしている。

それが当時の身の回りの普通の状況であった。かくして「本」のなかの活字を追い、論理の展開を追いかけて、著者の思考様式を追体験しつつ、言わんとする主張の理解に努めた。そして時折、忽然と新しい世界が目の前に開ける時こそ、読書の楽しみであり、勉学の喜びであった。

あれから半世紀の時が過ぎた。いま当時の方法で、教壇から講義すれば、おそらく多くの学生たちは悲鳴をあげ、FD委員会には苦情が殺到し、教員には教育能力がないというラベルを貼られて軽蔑されることであろう。近年において、PCにより情報を入手・加工・送信するテクノロジーは驚異的なスピードで進化しており、しかも文字より映像が氾濫し、もはや紙媒体の活字を追いかける学習方法など見向きもされない雰囲気である。大学院生ですら古典的名著やグランドセオリーの学習を敬遠する傾向さえある。

ユビキタス時代とやらが到来して、知的情報の生産・加工・配信のあり方が根本的に変化しようとする時、果たして大学の図書館に一体何が出来るのだろうか、また何をしなければならないのだろうか、館長室の一隅にて、ただ途方に暮れて溜息をついている。

(わたなべ たかし)

◆◆◆ 茶色い本がぎっしり並ぶ本棚の上の方に青色の背の高い本が有った ◆◆◆

京都文教短期大学図書館長

幼児教育学科・教授(造形表現) 津 田 直 樹

私はずっと絵を描いてきました。あなたはいつ頃から絵を描くようになったのかとよく聞かれることがある。

母は私を生んですぐ死んだ。病弱な父はその時から、子の親か、文学かを天秤に掛けて文学を選んだようだ。そして岩波、新潮からルナン、エクトル・マロ、パスカルの訳書を矢継ぎ早に出した。そんな父が一度だけ子の親を試みたことがある。突然庭に穴を掘り、慣れない手つきでセメントを塗って馬鹿でかい池を作り、私の欲しがる金魚をいっぱい泳がした。そして明るく朝赤い金魚がみんな腹を出して白くなっているのを見届けて、親を失敗して寝込んだ。父はその後一度も起きたことがなく病を治す気が全くなかったのである。

私が10歳の誕生日を迎えた日は長雨の降る日曜日だった。枕元へ行くと父は突然、本棚を指さして言った。あの本の好きなページを一日がかりで描いてきなさい。その茶色い本がぎっしり並ぶ本棚の上の方に青色の背の高い本が有った。私は一瞬躊躇した。今まで父のこのような言葉を聞

いたことが無い。ましてや父の本はどれも読めない文字ばかりの筈である。

青い本はセザンヌの画集であった。私は絵に関心が有ったわけではないが「風景」のページを開いた。何故かわくわくしながら目を閉じてはまた開いた。そして「サント・ヴィクトワールの山」に出合って涙が出た。山から風の音が聞こえ、幼児の頃に見上げた空にはほんわかと白い雲や月が動き始め、ヴィクトワールの山は近江の山々に変化して豪州音頭が聞こえてくる。私は生まれてすぐ琵琶湖に近い農家に預けられ、芋粥をすすり、アヒルと遊んで幼児期を過ごして4歳の時ここへ戻されたのである。夢中に描き進めるうちにセザンヌの故郷はいつしか私の故郷になっていた。

絵を持って再び枕元へ走っていくと父はやはり見たことのない嬉しそうな顔をした。それ以来私は毎日のように絵を描いては枕元へ行き、その父親は私が中学校に入学し図画部に入ったのを見届けて急ぐように逝った。ちなみにセザンヌは近代絵画の父と呼ばれている。



画家は風景と同化して己を観る。モチーフは画家の必然である。黄砂の中、農夫の傍らで毛布にくるまり眠る幼児。風の寒さに、大地の温もりに大きな器を育む君、急いで絵本と出会うことはない。ジャガイモの花や蝶と出会ってロバと遊んで、それからでよい。

(つだ なおき)

母親の手をしっかりと握りしめて歩いている2、3歳の幼児の後ろ姿は実にほほえましい。ほほえましいというより、ほっとした安心感にこちらが包まれてその光景にいとおしさを感じてしまうのである。子どもの手は子どもの世界を見事に表現している。指しゃぶりをしている子どもは、自分を包み守ってくれている世界を唇と舌で思いっきり味わっている。それは自分になじみ親しみ一体化する世界であろう。遊具を握りはじめることのできた子どもは、まさに世界を「持つ」のである。大人は概念の力を借りて世界を「持つ」が、子どもは手の感触そのまま世界を「持つ」ことができる。私達大人は当然のごとくにいつの間にか、この原初的感覚的手ざわりの能力を忘れてしまっていないだろうか。いいかえるなら、手ざわりが「持つ」世界とは脅威的に迫り来る「異」なる世界ではなく、自分の皮膚感覚になじみ一体化し、どこまでも親しみ溶け込んで行くことのできる世界である。本能が減退した動物、つまり人間は、本能・感覚の未熟さを補うために、文化という負担免除（Entlastung）の能力を発達させてきた、とA. ゲーレンは説く。自然的感覚を基盤として、やがて成長と共に子ども達は文化（遊びながら）を操る世界へと入って行く。たしかに文化による便利さによって、我々人間は本能・感覚の弱さに由来する負担から免除されはした。しかしそこには便利になればなるほど、文化に依存すればするほど人間は自然的感覚から乖離されてしまうのではないかという危惧がありはしないだろうか。なぜなら自然と文化とは人間という全体的生命体にとっては一つのものであるはずだからである。

手の感触・感覚は生（なま）の実体の世界を感受する。ところがその同じ手がなまの世界から遊離した文化の世界を操るのである。まさしくその意味では、本来手とは、自然の世界と文化の世界を強く結びつけている重要な鞆帯のひとつであると言えるだろう。また手ほど人間的な意味を具現

する器官はほかにないであろう。子ども達はなぜ砂遊びが好きなのであろうか。また、なぜに粘土細工が好きなのであろうか。さらになぜお絵描きが好きなのであろうか。なぜにあそまで「手遊び」が好きなのであろうか。そこに子どもの生きた感覚（自然）と遊び（文化）との間に織りなされる生命のリズムが、見事に子どもの世界と一体化されるからではなかろうか。J. J. ルソーは「自然に還れ」と主張した。またゲーレンはルソーを批判して「文化に還れ」と説いた。これは自然か文化か、の二者択一の問題ではない。なぜならその両者を美しく調和した生活世界（Lebenswelt）を子どもの手は我々に示してくれるからである。

指しゃぶりから分化して行く子どもの手の働きはやがて「指さし」なるきわめて人間的動作へと成長する。そして「指さし」の開始と同時進行的に言葉（文化）が誕生する。喃語の「ブーブー」「マンマ」「ネンネ」の段階から、ほしい物を求めて指示する「アレ」「コレ」の段階に入るのである。指しゃぶりから指さしへの成長には、手の自然な感覚から、人間的意味の世界（文化）への移行プロセスを読みとることができる。そしてくり返しになるが、この自然と文化を美しく調和した営みが子どもの遊びなのではないだろうか。子ども達は遊びながら自然および文化を天真爛漫に放射しているのである。

「霞立つ長き春日を子どもらと手まりつきつつこの日暮らしつ」子どもの純真な心に仏性を見ていた良寛は、日がな一日、子らと手毬、かくれんぼをして遊んだ。そのありのままの良寛自身の姿が彼の禅の思想であった。良寛の生き様は西歐的な「自然に還れ」でもなく「文化に還れ」でもなかった。日本海に面したふるさとに立つ良寛の像がみつめているのは、彼の母の生地、佐渡島である。この彼の瞳から伝わってくるのは、切々と母を偲ぶ良寛の深い心情（子どもの手）の「ぬくもり」ではなかろうか。

（おおくぼ さとし）

私のおすすめ3冊

家政学科・教授（食品学・食のリスク科学） 田中 恵子

『三色ボールペンで読む日本語』

齋藤 孝著／角川文庫

かなり以前のこと、教員を目指して大学への編入を希望する学生が、成績に疑義を申し出た。私は、貴女は問題の主旨を大きく読み違えたために成績が芳しくなかったのだと答え、本書を紹介した。斉藤氏が薦めるのは、「青で『まあ大事』、赤で『すごく大事』、緑で『おもしろい』と、三色ボールペンで色分けしながら文章に向き合う」というとてもとっつきやすい読書法。好き・嫌いはあると思うが、この単純明快なトレーニング法を一度は試してみる価値はあると思う。同じ作者で『三色ボールペン情報活用術』（角川書店）もある。

『流れる星は生きている』

藤原 てい著／中公文庫

約65年前の終戦直後、ひとりの若い日本人女性が、生後一ヶ月の赤ん坊を含む幼子3人を連れて満州（中国）から引き揚げた。死線をさまよいながら、気力をふりしぼり知恵を働かせて、生への執念をもって子供を守り通す。本書は、その壮絶な脱出の記録。あとがきに、「彼らが人生の岐路に立った時、また苦しみのどん底におちた時、お前たちのお母さんは、そのような苦難の中を、歯を食いしばって生きぬいたのだということを教えてやりたかった。」とある。現代を生きる若い人に読んで欲しい一冊。

『けんじゅうこうえんりん 虔十公園林』『よだかの星』収録

（草思社CDブック；長岡輝子、宮沢賢治を読む 第8巻）

宮沢 賢治原作／草思社

宮沢賢治の言葉の美しさは、音の世界の中で一層鮮やかに心に響く。これは、知的障害をもち、村の大人だけでなく子供たちにさえも馬鹿にされていた「虔十」という青年が、野原に杉の苗を植えて育てたというお話。虔十の死後、杉は「立派な緑」の公園林となり町の子供たちの幸せの空間となる。「ああ全くだれがかしこく、だれが賢くないかはわかりません。ただどこまでも十力の作用は不思議です」…ほんとうの「知性」とは何かを洞察した作品。ジャン・ジオノの『木を植えた人』（ごくま社）もぜひ。どちらも声にだしてゆっくり味わいたい。

（たなか けいこ）

『選書ツアーで出会った絵本』

幼児教育学科2回生 緒方 愛

私は今回、選書ツアーというものに参加した。そこで、今までほとんど目を向けたことのなかった本から馴染み深いものまで、たくさんの本に出会うことが出来た。その中で一冊の絵本が目についた。それはピアトリクス・ポター作の『ピーターラビット冬のおはなし』である。

今回のおはなしは冬を舞台としている。いつもの緑色が広がる世界とは一風変わって、白色と青色をベースに描かれている。私はその変化に魅了された。その一風変わった世界の中にどのようなおはなしが詰まっているのだろうか。

ある雪の日の午後のこと、主人公ピーターはお母さんに頼まれて、モミの大木の下にある家を出て、雪の積もった森に焚き木を拾いに行ったのだ。ところがそれは、思いもかけない大冒険の始まりだった。森を少し行ったところで、いとこのベンジャミン・バニーと出会い、親の忠告に耳を傾けず二人は森の奥まで入り込んでしまった。そして、焚き木のことなんて忘れて二人は遊びに夢中になってしまうのである。満足した二人が帰ろうとしたところに、子どもが居なくなると泣いているねずみの奥さんに出会う。心当たりのある二人は奥さんの子どもの危険を察知し、助けに行くことを決断する。しかし、自分たちの身も危険にさらされていることに気付かないでいた。そんな二人が、なんとかその危機を乗り越え、ねずみの子どもたちを助けることに成功し、冒険を無事に終え家に帰ることが出来たという話である。

私は幼い時にこの絵本のシリーズをたくさん読んだ。ピーターが与えてくれる冒険に夢中で、この空想の中で生きる小さなウサギに勇気を貰っていた。そして、今でも変わらず好きな場面がある。ピーターが家から出て冒険へと出発するところだ。今からどのような面白い冒険をしてくれるのだろうと、期待感に溢れ、子ども心をくすぐられ

た。しかし、今回はおはなしが進むにつれて、いつもとパターンが異なっていた。ねずみの子どもたちを食べようと家に持ち帰るアナグマのトミーの姿。その子どもたちを助けようと後をつけるピーターたちの姿。そして、そのピーターたちを食べようと狙うキツネのトッドの姿。それらの姿が同じページに描かれ、一枚の絵として目にした時、私は面白さを感じずにはいられない。自分のことしか見えていなくて、背後に迫る危険に気付いていないのだ。これを面白く感じるのは傍観者として物語を見ているからである。私がピーターの立場だったら、迫る危機に気付かず命を落としてしまっているかもしれない。しかし、物語ではピーターたちが上手くねずみの子どもを救出し、その場から逃げる事が出来たのだ。私は彼らの勇敢さに圧倒され、彼らのように勇敢でありたいと思った。

この絵本には、動物が服を着て共通した言葉話す「虚構」と、動物たちの弱肉強食の世界を描いている「事実」が組み込まれている。この二つの視点を一貫して見た時、ポターの自然に対する情熱とピーターというキャラクターを通して語られる話は、大地に生きる動物たちの風景であり、自然に育まれて生きる幸せを感じさせる。

この絵本を読み終えて、私は温かい気持ちにならずにいられなかった。ピーターたちが家に帰ってきた最後の場面で、帰る場所がある重要さを感じた。家庭は生きていく上でかけがえのない拠り所となるのだと改めて思った。家庭の大切さが希薄化している今の世の中だからこそ、多くの人に読んでもらいたい絵本である。

(おがた めぐみ)

『ピーターラビット冬のおはなし』ピアトリクス・ポター作、杉本詠美訳／大日本絵画



選書ツアーとは、簡単に言うと希望した学生が10冊くらい実際ジュンク堂書店に行って、自分の欲しい本を選んで学校のお金で買ってもらおうというもの。そこには漫画や趣味性が強いものは除くといった制限はあるけど、ある程度欲しい本を買ってもらえる。僕は今回初めてその選書ツアーに参加した。理由は大学図書館でバイトをしている僕に司書の方からお誘いをいただいたという、いたって普通の理由。でも、今まで自分が欲しかったけれども買えなかったハードカバー本のような高価な本も図書館で買ってもらえるというのは本当に嬉しいことだった。

当日になるまでに何冊かピックアップしていたのだけでも、実際に本を選ばせてもらう時にはあれもこれも欲しくなってしまうと、結局制限された倍以上の本を選んでしまった。その時考えていた事は、図書館でバイトしていた経験も活かして出来るだけ他の人が選ばない、図書館にない本、それでいて他の人が読みたくなる本を探そうってこと。例えば大学にある本は、専門書はたくさん置いてあるけど、最近の小説や初心者向けのHow to本はあまり置いてないとか。

僕が選んだ本の中でお勧めしたいのが『ボールペンでイラスト：ちいさなお絵描きレッスン帖』という本。あまり良いことではないけれども、授業中ボールペンでノートの端っこだったり、教室の机に落書きをすることってよくあると思う。特に女の子は。僕は絵が上手じゃないから、あまりしないけれど。そんな人のための一冊。どうやったら上手く描けるようになるか、こうしたら可愛いとかそんなことが書いてある。気ままに自由に描くのも楽しいけどそういう目線で絵を描いてみるのはどうだろう。もしかしたら今以上の楽しみが見つかるかもしれない。

あともう一つ、選書された本の中で僕が個人的にお勧めしたいのが、『366日誕生花の本』という瀧井康勝さんの本。誕生花っていうのは自分の生まれた日の花のこと。366日分それぞれ誕生花があってそれが全部載っているの、自分の誕生花

や知り合いの誕生花を調べたり、相性の良い誕生花はなにか調べてみたりと、なんとなく目についたら、つい手にとってページをぺらぺらとめくって読んでしまうこと間違いなし。

選書ツアーで選ばれた本を見て、今回選書ツアーに来た人は小説が好きなんだなってまず思った。半分が小説だったから。でも中には最近流行っている歴史モノや、粘菌の写真集を買っている人もいた。それを見ると皆がどういう本を欲しがっているのか、今何が流行っているのか、ということが少しだけでも分かって勉強になる。やっぱりこういう機会をくれる図書館の人には感謝してもしきれないし、もし来年も選書ツアーが行われて、縁があったなら参加させてもらいたいと思う。

選書ツアーの本は大学図書館であれば入口入ってすぐの場所、カウンターの目の前に置いてある。今まで図書館をあまり利用しない人や課題レポートのためだけに利用している人は多いと思う。けれども図書館には選書ツアーで選ばれたようなとても読みやすく身近な本というのもたくさんある。そういう人もこの選書ツアーで選ばれた本をきっかけに本自体はもちろんだけれども、もっと図書館に親しみを持ってほしい。

最後になるけれども、僕が選ばせてもらった『かわいい写真を撮る方法。』という本が誰かにカバーとバーコードを剥がして持ち帰られた。びっくりする話だけれども図書館の本というのは誰かのためだけの本じゃない。当たり前だけれども皆が読むための図書館の本だ。他に読みたい人もいるし僕もまだ読んでいないから、お願いだから返して下さい。

(そのやま てつじ)

『ボールペンでイラスト：ちいさなお絵描きレッスン帖』 がなはようこ著／飛鳥新社
『366日誕生花の本』 瀧井康勝著／三五館
『かわいい写真を撮る方法。』 成美堂出版編集部編／成美堂出版